氏　　名	高城　玲
学位（専攻分野）	博士（文学）
学 位 記 番 号	総研大乙第 151 号
学位授与の日付	平成１８年３月２４日
学位授与の要件	学位規則第６条第２項該当
学 位 論 文 題 目	タイ中部農村における相互行為の民族誌的研究
論 文 審 査 委 員	主　査　教授　田村　克己
	助教授　韓　敏
	助教授　森　明子
	教授　田邉　繁治（大谷大学）

論文内容の要旨

本論文は、タイの中部を貫流するチャオプラヤー川の起点となるナコンサワン県の農村社会を対象とする民族誌的研究である。その目的は、タイ中部農村における人々が、日常生活において、いかに互いに行為しているのか、また、そうした日々の相互行為が社会の秩序や社会といか様に結びついているのか、具体的な民族誌的記述として、その過程を明らかにすることにある。別言すれば、タイ中部農村の人々が織りなす日々の相互行為の態様を示し、そうした相互行為が幾重にも積み重ねられていく過程、すなわち関係性として社会や秩序が生成されていく過程を民族誌的に描き出すこと、それが本論文の目指すところである。

第１章序論では、これまでの先行研究を整理することによって、本論文の目的から導き出される問題の所在を明らかにする。これまでのタイの人類学的な先行研究において、宗教儀礼の場における慣習的行為に着目し、社会の秩序との関係を問いかけた研究は既に存在する。そこで、本論文では、宗教的儀礼以外の場に議論を拡げていく必要性が指摘される。それは、人々が集まって濃密な相互行為を遂行していく共在の社会的場であり、具体的には、国家による研修訓練の場、労働や仕事が集約される農作業の場、選挙運動の政治的な場、という本論文で取り上げる３つの場である。また本論文は、選択自由な行為ではなく、ゲーム感覚によって遂行されていく慣習的、拘束的行為のやりとりに着目すべきことが明らかにされる。つまり、これまでの研究で主観主義的色彩が濃い相互行為論ではなく、相互行為を慣習的行為であるプラクティスのやりとりとして読み換え、それを社会の秩序や社会との関係の中に捉え返し、具体的な過程として記述していくという視座が示される。

第２章では、対象となる調査村の概況を示し、特に相互行為が遂行される集まりの社会的場に本論文は注目していくべきことを確認する。まず、第１節で主にその地理的側面を明らかにし、第２節では、社会経済的背景と行政組織をはじめとする政治的諸組織、制度に関して、統計的な資料をまじえながら記述する。第３節では、宗教的側面、実践のあり方を概観するとともに、そうした宗教的な儀礼の場が、様々な諸関係やネットワークを利用して人々が集う場となり、相互行為が行われる場として位置づけられることを示す。そこでは、寺や僧侶に寄進した金額、集まった人々の身なりや所持品、身体的立ち居振る舞い、提供される食事の豪華さ、あるいは相互行為の中で用いられる呼称や称号などによって、ある特定の人物が、非対称的に卓越する者として可視化され、差異化されて行く場ともなっていることが見て取れる。

第３章から第５章までの３つの章では、調査村における社会やその秩序に光を当てる上で欠くことのできない宗教儀礼以外の３つの場を取り上げ、そこにおける相互行為を微細に描きだしている。

第３章では、国家やその機関が村の住民に直接語りかけ、働きかける場として、各種の研修、訓練や国王誕生日の式典などを取り上げる。そうした場における統制された相互行為を７つの事例として具体的に検討することによって、村の中の国家のあり方、支配のあり方の微細な過程を民族誌的に示す。研修訓練などの場は、いわば国家などが、支配の身振りと記憶を個々人の身体に埋め込んでいく過程となる。またそれは、一方的で非対称的

な関係の中に差異化されたカテゴリーや命名、身体動作の模倣、反復とその管理が繰り返され、それによって秩序化された社会が作り上げられていく過程でもある。

第４章では、村での生活の主要な部分を占める農耕と労働のあり方を記述し、特に農作業労働の場における相互行為に焦点を当てる。まず、第１節では調査村における農耕とそれを支える労働の現在のあり方を概観する。第２節では、中心的農耕となっている稲作の一つの例を取り上げ、ある世帯の農作業にいかに労働力が提供、調達されるのか、耕作過程を順に追いながら、数量的なデータを含めて検討する。ここでは、軽微な労働力のやりとりを頻繁に積み重ねていく過程に着目することで、パトロン・クライエント関係を実体的に既にそこにあるものではなく、日々緊密化し、紡がれていく過程の中に示している。そして、第３節では、農作業の場における相互行為に焦点をあて、そのより具体的なあり方を、言語と身体的やりとりを含めて３つの事例から検討する。その中での、呼称や褒め言葉、比喩とその模倣、リズミカルな発話、名付けとカテゴリー化、それに伴う身体動作などによって、田の持ち主を中心とする一方が差異化、卓越化されるかたちで、賃金農業労働者のケークらとの関係が再強化、再確認されていく過程が見て取れる。

また、相互行為が希薄、もしくは不在である東北タイから出稼ぎに来た労働者、ケーク・イサーンに対しては、「私達」というカテゴリーとは明確に切り離し、彼らを侮蔑し、差別化する対象としての名付けが、「私達」内輪の相互行為の中で、度を増しながら次々と生みだされていく過程もそこには見て取れる。つまりこれは、「私達」という恣意的なカテゴリーを、具体的な行為の遂行的なやりとりの過程で、命名し、分類し、卓越化することによって、ケーク・イサーンとの関係をあたかも正統なものであるかのように生成させ社会の秩序や社会と成っていく、まさにその時その場でもあったと考えられる。

第５章では、ガムナン選挙の制度的背景、政治過程を記述した後、個別訪問、饗応、買収といった選挙運動における相互行為の１４の事例を具体的に示す。そこでは、選挙運動という政治的な場において、いたる所で、モノや身体動作による差異の可視化や、恣意的ながらも、呼称などによって、命名、分類、カテゴリー化されることによって、差異化された非対称的な関係が正統なものとして生みだされていく相互行為の過程が、いくつも見て取れる。また、いくつかの事例では親族関係などの民俗的な関係概念が、規則として実体的にそこにあるものではなく、プラクティスのやりとりの中で戦略的に利用されるひとつの資源であることを示している。ここでは、相互行為の視座から見ることで、親族関係というある種の資源が、新たな擬似的親族の命名によって、社会の秩序と成っていくというひとつの過程を見据えることが可能となる。

本論文は、人々の集まり、共在の社会的場において、民俗的な関係概念などを多様な資源のひとつとして戦略的に利用しながら、ゲーム感覚によって遂行される、プラクティスのやりとりの過程を民族誌的に記述する。そこでは、象徴権力、差異化、戦略という概念に分析の目を向けることで、命名や分類、カテゴリーをめぐる卓越化、また、身体的慣習行為などとして可視化される差異などが、恣意的なものとは気付かずに、誤認というかたちで生みだされ、再構成されていく過程が指摘される。つまりそれは、十分に認識されていない恣意的な諸関係が、相互行為を通じて、具体的に呈示、命名、分類されることによって、非対称的な関係として生みだされ、社会の秩序や社会が生成されていく過程であると考えられるのである。

論文の審査結果の要旨

本論文は、タイの中部を貫流するチャオプラヤー川沿岸のナコンサワン県の農村社会を対象として、人々の日々の相互行為が、社会の秩序や構造といかに結びついているのか、その過程を明らかにすることを目的としている。

まず序論において、先行研究を整理し、タイの人類学的研究を５つの方向から検討して、慣習的行為と社会の秩序との関係を、宗教儀礼の場以外に広げる必要性を指摘する。本論文の中心をなす第３章から第５章は、この指摘にもとづいて、それぞれ国家による研修訓練、農作業、選挙運動を具体的な場として取り上げ、慣習的行為の生成する場を描き出す。これは、日常的な生活の場における相互行為のやりとりを、克明に分析した意欲的な記述研究であり、本論文は何よりもまず、この記述の質の高さにおいて評価される。

この記述分析が、ブルデューのプラクティス理論で、不可視あるいはブラックボックスとされている部分に理論的な突破口をもたらすものと考えられ、社会人類学上の一つの貢献とみなすことができる。すなわち、相互行為を慣習的行為のやりとりとして読み換え、その積み重ねが、非対称的な社会関係を維持し、再生産していくことに着眼し、それを具体的な過程として記述するアプローチを採用した点である。慣習的行為のやりとりの過程に埋め込まれている、その場その場での呈示・命名・分類が、非対称的な関係としての諸関係を再生産していることを、卓越化や差別化の概念を用いて明らかにしている点は、高く評価される。それは、相互行為の動態的側面に光を当てるものであり、非対称的関係から変動を分析していく可能性を示している。さらに、こうした相互行為の拘束性、慣習性の記述と分析を一層進めることで、主体の構築をめぐる新たな議論へと展開していく可能性を含んでいる。

一方で、本論文で記述分析の対象とした、場で生成する非対称的関係が、ともすれば社会構造や秩序に直接結びつくかのような印象を与えている点は、いささか議論が不足している。また、調査地の社会的-文化的背景の記述が乏しく、論文の表題に「民族誌的研究」としながら、民族誌としての位置づけが結局曖昧になったことも、問題として指摘される。とくに相互行為の背景となる親族関係、近隣関係、年長者-年少者の関係などは、第２章の村の概況のところで、説明されるべきであったろう。

上記の問題点は指摘されるものの、本論文は、既に述べた記述研究としての価値やその理論的寄与において博士の学位に価するものである。

タイの人類学的研究におけるこの種の研究としては、タイ人の若手研究者が５年ほど前に行った、路上における相互行為の研究をあげることができるが、本研究はこの研究に比して、記述の「厚さ」において優れており、まさにこうした研究を今後に拓いていくものとして高い価値をもつ。それは綿密なフィールドワークと、多数の収集されたビデオなどの映像音響資料に基づくものであり、それらの緻密でねばり強い分析は特筆されるべきであろう。